

# 光の家

『光の家』

第I期 全25卷

第II期 全25卷

1925年(大正14)5月～1931年(昭和6)6月

1931年(昭和6)7月～1935年(昭和10)8月

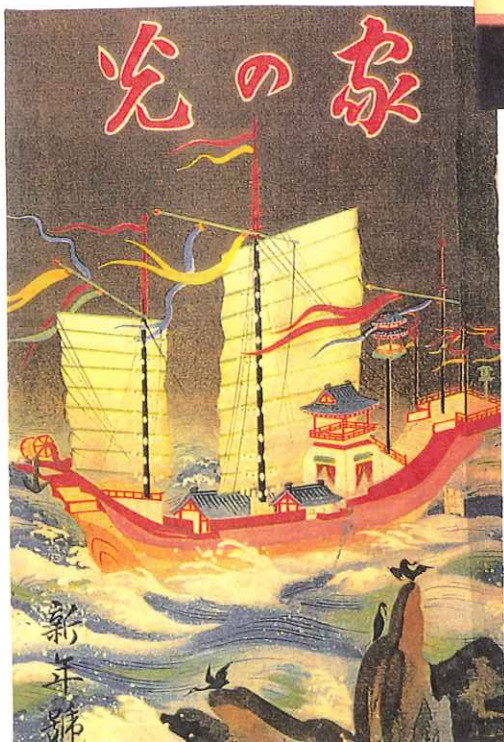
本体抽価格 45万円

本体抽価格 45万円



慢性的貧困に疲弊する農村生活の向上と自立、協同精神を家庭から育むため発刊された家庭雑誌。産業組合中央会機関誌として創刊され、十年後には百万部を突破した本誌こそ全国各地の農村の状況を伝える貴重な資料であり、近代史・地方文化史・自治問題・女性史研究等に資する文献として復刻刊行！

推せん 井出孫六 川野重任 佐藤喜春 竹部喜代子 樋口恵子 宮崎礼子 矢口光子(五十音順)  
解説 古桑実(協同組合図書資料センター)  
不二出版





### 近代日本の農村と 産業組合の歴史を明らかにする

本誌は、現在の全国農業共同組合中央会（JA全中）の前身である産業組合中央会が、産業組合法公布二五周年事業の一つとして、組合員教育のために一九二五年、創刊した家庭雑誌である。

産業組合中央会では、第一次世界大戦後の急激な独占資本の集中によって困窮に追いやられ、飢餓と娘の身売りなど悲惨な状況にあった農村で、農民が産業組合に結集することによって資本主義の魔手から自らを守るために組合員の「協同」を訴えた。その精神を広めるメディアとして誕生したのが本誌である。

創刊号の巻頭に謳われているように、その精神は共同精神を家庭において涵養することにあり、めざすところは家庭で協同心を育み、お互いの人権を尊重し、人間平等と相互扶助の精神を根底において共存同業の社会の実現にあった。

その内容としては、本誌が「一家一冊万能雑誌」と称されたように、修養、解説、農業、婦人、子供記事等、多岐に亘り、「共存同業」相互扶助「協同」といった、産業組合精神を説くと同時に、農村の生活・文化の向上を目指し、実用記事にも特色がみられる。また、投書欄、座談会記事を通して農村生活者の声をきくことができるのも貴重である。上司小剣、菊池寛、白鳥省吾、直木三十五ら広範な作家の作品のほか、岡本一平、田河水泡をはじめとする挿画・表紙絵も充実している。発行部数は昭和一〇年九月号で二〇〇万部を超え、農村の社会的・経済的発展をめざした雑誌として、農村社会に根づいていった。

現在、本誌の原本を所蔵している大学・研究機関は極めて少ない。近代日本史を築いた基底というべき農村と産業組合の歴史を明らかにする重要資料として、創刊より一九四九年までの全号を「都市版」を合わせ、四期に分けて復刻し、地方文化史・自治問題・農業史・女性史研究等に提供するものである。——不二出版

「推せんと言葉」順不同

### 恐慌期農村の 貴重な資料・情報を満載 川野重任

（東京大学名誉教授）

この推薦文を書くべく私は家の光協会資料室を訪ねて思わず時を忘れた。前後七〇年近くにも及ぶ既刊『家の光』誌の分量もさることながら、内容の面白さ、貴重さに思わず読みふけてしまうのだ。かつてUCLAのある研究者が戦前の日本農村と対外政策との関連の研究に平日、資料を『家の光』誌に求めて、ここに半年近くも通ったという話を聞いてさぞかと思った。それほどこの雑誌の中には、大正末年から戦前、戦後にかけての日本の農村社会の生きた動きを知るに足る貴重な資料が溢れている。元来、今の各種協同組合、かつての産業組合の中央指導組織、産業組合中央会によって始められ、後、家の光協会に引きつがれ、忽ち発行部数一〇〇一五〇万の「一家一冊万能雑誌」となるにいたったものだが、その内容は決して単なる協同主義啓蒙の情報誌といったものではない。特に今回の復刻版第一期、二期の時期はあたかも昭和農業恐慌期の、農村を中心とした極端な社会的不安、動揺の大時代で、この情勢下に政治がいかにこの農村不況と不安に対応しようとし、また、農村がいかにこれに応えようとしたかを知るについて、極めて貴重な情報、資料を豊富に提供している。それはまた、一種の社会改良主義を標榜する協同主義、協同組合主義にとつての正念場でもあったが、その意味でも貴重な歴史的資料として推薦したい。

### 協同の精神で不況を克服

佐藤喜春（全国農業協同組合中央会JA全中前会長）

今日、わが国の農業・農村を取り巻く環境は大変厳しく、自由化、都市化、高齢化の進展、さらには減反、担い手の不足等により、農村の活力低下が進んでいます。



- 一九〇〇年 産業組合法公布
- 一九〇五年 大日本産業組合中央会創設初代会頭・平田東助
- 一九一〇年 韓国併合
- 一九一四年 第一次世界大戦はじまる
- 一九一八年 米騒動全国に波及
- 一九二〇年 戦後恐慌、米価暴落、小作争議急増
- 千石興太郎、中央会主事に就任
- 一九二二年 前日本勧業銀行総裁志村源太郎、第二代中央会会頭に古瀬伝蔵、賀川豊彦、杉山元治郎らと日本農民組合を創立、雑誌「農政研究」刊行
- 一九二三年 志村・千石体制始動
- 一九二五年（大正一四） 『家の光』創刊
- 一九二八年 『農村文化の提唱』（月号巻頭言）
- 一九二九年 梅山、編集主任となる
- 一九三〇年 世界恐慌、日本に波及
- 一九三一年 『婦人公民権が議会を通過したら』（三月号特集）柳条湖事件
- 一九三二年 雑誌「家の光」誌上に「家の光新聞」新設
- 五・一五事件
- 一九三三年 農産漁村経済更生運動開始
- 一九三三年 『家の光』百万部普及五ヶ年計画
- 一九三四年 賀川豊彦の連載小説「乳と蜜の流るる、郷」はじまる
- 「被服の改善目標十五カ条」「食物の改善目標十六カ条」（二〇月号）
- 「悪習慣の矯めなほし運動」（二一月号）
- 一九三五年 『家の光』普及部数二〇〇万部突破、「キング」誌推定七五万部、「主婦の友」八五万部
- 一九三七年 蘆溝橋事件
- 「皇国のため挙国一致せよ」（九月号「日支事変特集」）
- 一九三八年 国家総動員法公布
- 一九三九年 第二次世界大戦はじまる
- 一九四〇年 大政翼賛会発足
- 「有馬頼寧を囲んで新体制の動きを訊く」（二〇月号）
- 一九四一年 六月号より農業記事を「増産推進の頁」と改称、「職域奉公」の提唱
- 一九四三年 「皇国の興廃を決するもの」（一九四三年五月）、「急ぎ機でも多く戦線へ」（一九四四年二月）、「我らも体当たりを取行せん」（同年一月）など、戦争協力を促す記事がめだつようになる
- 戦時統制を強化を行うため、農業団体法により産業組合を農業会に統合
- 一九四五年 七月、九月まで休刊
- 敗戦

一方、モノ、金より、人々は生きがいや心の豊かさを求める文化の時代ともいわれますが、文化的で心豊かであるためには、何よりも地域経済の安定、国土や自然環境の維持が必要です。そのためには、活力ある農業・農村が確立されなければなりません。

『家の光』が産業組合中央会（今の農業協同組合中央会の前身）から創刊された、一九二五年（大正一四年）頃は、農村は冷夏による凶作や飢餓等で不況のどん底にあり、農村が疲弊、困窮する一方、富が急速に地主や独占資本に集中するという時期でした。この疲弊した農村を救うために、先人たちは血の滲むような苦勞と努力をされ、その心を支えたのは「協同」の精神にはかなりません。『家の光』はこの「協同の心」を家庭で育むことを編集方針に発刊され、以来今日まで約七〇年間変わることなく受け継がれています。

このたび、不二出版より『家の光』の復刻版ができることは、当時の国民生活、農村社会の実態を知る貴重な史料として、また困難な事態に対処してきた先人たちの知恵や情熱、実践方法を学びとる教材として、活用出来ることになり、今日の農村・農業が抱える問題にどのように対処すべきかを示唆するものとして極めて意義深いものがあると思います。

### 農村生活改善の元祖

矢口光子（元農村生活総合センター理事長 故人）

終戦後の昭和二三三年秋に農林省に生活改善課がおかれ、農政に始めて生活を考えることを連合軍により促された。日本人の発想によるものでもなく、また貧困のどん底のような農村の生活へのお手伝いをするということだから、周囲の理解も薄く、並大抵ではなかった。まして男尊女卑の歴史とした農村の女性達に行動を促すことも難儀であった。しかし全国の農漁村の女性達が一斉に立ち上がったのは壮観であった。これは『家の光』が大正一四年に創刊され、その中に農村の生活を向上させる手だてを普及記事として組みこんでいたことが基本にあったからである。昭和一〇年には一〇〇万部をこえたという発行部数は、農家の人々に光を与え、杖ともなってい



た証拠であろう。欲しがりません勝つ迄は、と思いきまされていた非常時や戦時中も、『家の光』が「自分の生活の自立」を促し、プラクティカルな姿勢・モダンイズムの態度をとりつづけたことには、心から脱帽するのみである。

今、日本の生活の状況は怪しくなっている。都市文明にはその地域の生活特質がみられなくなったが、まだ農村にはその地域の生活質が残っている。これを背負い続けた『家の光』の功績を我々は広く報せ感謝したいと思う。

## 昭和史検証の重要な視角を内蔵

井出孫六 作家

産業組合法が公布されたのは明治三三(一九〇〇)年、つまりそれが一九世紀の終わる年であったのは、象徴的なことだ。日清戦争をへて、日本社会の構造に大きな変化が現れたことを、それは示していたといえぬだろうか。

それから四半世紀、産業組合は農村を基盤として発展し、三三七万組合員を対象に、産業組合法公布二五周年事業として機関誌『家の光』の創刊されたのが大正一四(一九二五)年であったのも、象徴的なことといわなければならない。

大正一四年といえば、すでに各地に小作争議が頻発していたが、それは昭和の農村恐慌という激震の予兆でもあった。雑誌『家の光』はそのような危機に向けて船出していったものと読みとることができ。

産業組合の機関誌として位置づけられていたとはいえず、「一家一冊万能雑誌」のキャッチフレーズのもと、「共存同栄」をうたった『家の光』が全国の農家に迎えられ、昭和一〇年には一〇〇万部の大台にのったその秘密は何であったのだろうか。

やがて時代は不幸な戦争に突入していくことになるが、『家の光』発展の軌跡には、よきにつけあしきにつけ、日本の農村のいづく苦惱が焼きこまれていったといつてよく、そこには昭和史検証の重要な視角が内蔵されているといつてよいだろう。

を養ふところは、実に組合員の家庭そのものである。……本誌の目的は、この共同の泉を家庭で涵養せんとするに存する」と掲げられました。

『家の光』は発刊以来、幾多の困難を極めながらも趣意書内容の記事を忠実に掲載し、農村・農業情報誌として、生活文化誌として、読者に新しい知識・技術を提供し、知恵を引き出し、励みをあたえ心豊かな農村の暮しづくりに大きく貢献しています。

国際化、情報化のめまぐるしい発展を遂げた今日、あふれる物資利便性の高い文化生活に、個での暮らしを楽しむ風潮が広まり、連帯や協同活動への参加が疎まれる傾向です。

かかる時代なればこそ、肩を寄せ、支え合い、分かち合い、励まし合って今日を拓いた人々の活動や足どりを読みとり、近代化で失った様々な技を呼び戻し、心を潤し、生活をエンジョイすることが大切と考えます。

今度の復刻版『家の光』は、草創期の時代を知らない年代も多くなった現在、「温故知新」の好書となり、協同組合運動の発展に大きく資するものと期待いたします。

## 未来へのメッセージ

宮崎礼子 日本女子大学教授

「腰の痛さや この田の広さ 四月五月の日の長さ…… 農人は戻ると 団子汁は煮えず 杓子は見えず 赤児は泣くし……」(田植歌)。特殊日本的「家」制度のもとで「奴隷に近い」といわれた農業女性は六〇〇万人。農家戸数の七割の四〇〇万戸が小作と自作、乳児死亡は出生一〇〇に対して一七(郡部)にも及んだ。日本には「家はあっても家庭は無かった」(丸岡秀子)とき、『家の光』は「家庭こそ共同の泉である。われ等の理想の社会は組合員の家庭で養われる」と創刊の言葉(志村源太郎会頭)を掲げて発刊されている。

まもなく農地改革後半世紀。いま日本の農業は外圧の下で農業経営体の株式会社化議論さえも農政に登場している。それを許さないためにも、担い手としての家族経営農業の足腰をいかに強くするか



## 「温故知新」の好書

竹部喜代子 (JA全国女性組織協議会顧問)

農村では小作争議が頻発し、社会問題となっており、これを救う道は、組合運動によって経済の向上を図ることと考え、それには組合員および家族の産業組合運動の理解を深める家庭向け雑誌を、産業組合法公布二五周年の大正一四年五月に、『家の光』を発行にこぎつけました。志村源太郎会頭が創刊号の巻頭に「われ等の理想は、同心協力」の精神であり、共存同栄の社会である。……この共同精神



が要請されるのである。そのためには、農家経営者(生活と生産)として全国津々浦々で活動を展開している農業女性の、権利や地位の実質的保障を二〇〇一年に向かって実現することが基本となる。

『家の光』復刊によって伝えられる未来へのメッセージは、いま家族経営農業Ⅱ農業家庭を単位としながら、互いに助け合うこと、すなわち共同、協同の積極的意味づけに活かされたいものと思う。

## 農村の女性問題を見つめなおすために

樋口恵子 (東京家政大学教授)

戦前、女が人間扱いされなかった時代、なかでも農村の嫁などは牛や馬と同じで丈夫でよく働き、よく産みさすればよかった時代。何度か襲う凶作は、つねに飢えの恐怖をもたらして、農村の女性は二重の抑圧と向き合わねばならなかった。

そんなとき、力のない一人一人が「組み合う」ことにより困難な状況を克服しようと産業組合中央会ができたことは、ある意味では奇跡のようなできごとだった。その共同精神を「愉快で幸福な」「健全なる」家庭で育もうという趣旨で発刊されたのが本誌『家の光』である。

『家の光』はおよそ文化的なものから見捨てられていたに近かった農村女性の心をたちまちとらえ、その生活改良主義は豊富な実用記事と共に浸透していった。しかしそれがたとえ家庭内の平等を謳ったものであっても、母性と性別分担が強調されている限り、農村女性の解放にはつながらないことはいままでもない。また、本誌が小作争議にあらわれるような農村の不満を緩和する役割を果たしたことも事実で、先の侵略戦争へ向けて多くの兵士を無条件にささげることになったためにもみられなかった。

農産物の輸入自由化、減反、結婚相手不足、等々農村の抱える問題は今も大きい。そして問題があればあるだけ、魅力ある農村作り



話の合組業産村農 (40)



農村産業組合運動の重

千石興太郎

農村産業組合運動の重要性

我國一萬四千有餘の産業組合中、四百餘の市街地信用組合と市街地購買組合を除きたる、殘餘の殆んど全部は農村産業組合である。五百萬人に達せんとする組合員中、三百二十一人餘は農村産業組合の組合員であつて、農家戸數五百五十七萬五千に比すれば五割六分の割合を示してゐる。此の如く農村産業組合は、我國に於て主要なる地位を占むるに至り、我國産業組合は農村産業組合であると共に云はれるに至りたるは、農業が我國の主要産業であり、農村の數、農家の數が大多數を占めてゐる爲めであるは勿論のことであるが、我々としては、農村産業組合運動に主力を集中する特殊の理由を有するからである。即ち、之を産業組合運動の上から観るときは

心む羨を人 (22)



訓養修

人

を羨む心

法學博士 農學博士

新渡戸稻造

組合員美談

販賣部の先頭に

女子青年團の活動

ここは木曾の御嶽さん夏でも賑い……の木曾藩で有名な長野縣西筑摩郡福島町の隣村新開村の黒川部番である。

この黒川女子青年團長征矢ぬい子さん(二三)は嫁入り盛りの娘にもかかはらず、團員の先頭になつて、恩賜記念林の手入れを引き受けて、協同して働き、その資金は村の黒川信用組合へ預ける。今日では積り積つて五百六十圓と云ふ程纏まつて来た。

そこでこの金の利子を、社會的に有意義に使ふことを工夫し、先づ春秋二回敬老會を開いて、老人達を招待して何かと慰めるのであ

憎むものもある。これは病的現象ののである。

老婦人が来たことがある。芝居や其跡倉江の島を見てはどうかといつたりますから私だけ行くことは見合せ

行つたが宜らう。國に居ては、鑛でめて東京へ來たら、鎌倉江の島まらよからう。東京へはめつたに來るしい所を見物し、土産話をもつて歸あらう」といつたが  
八から年老つた己を措いて、自分一何の事かといはれる」といつて終に



光の家

# 家の光

《昭和雑誌》

第Ⅰ期 全25巻

1925年(大正14)5月～1931年(昭和6)6月

抽定価 本体 45万円十税

第Ⅱ期 全25巻

1931年(昭和6)7月～1935年(昭和10)8月

抽定価 本体 45万円十税

第Ⅲ期 全52巻

1935年(昭和10)9月～1949年(昭和24)12月

抽定価 本体 92万円十税



五月號

我が子が國の子 興亜の子



大東亞戰爭二周年記念

十二月號

勝ち抜くあの日の大きな感激で！

慢性的貧困に疲弊する農村生活の向上と自立、  
協同精神を家庭から育むため発刊された家庭雑誌。  
産業組合中央会機関誌として創刊され、十年後には  
百万部を突破した本誌こそ全国各地の農村の状況を伝える  
貴重な資料であり、近代史・地方文化史・自治問題・  
女性史研究等に資する文献として復刻刊行！

推せん 井出孫六・川野重任・佐藤喜春・竹部喜代子・  
樋口恵子・宮崎礼子・矢口光子(五十音順)

解説 古桑実(協同組合図書資料センター)

不出版





### 近代日本の農村と産業組合の歴史を明らかにする

本誌は、現在の全国農業共同組合中央会（J A 全中）の前身である産業組合中央会が、産業組合法公布二五周年事業の一つとして、組合員教育のために一九二五年、創刊した家庭雑誌である。産業組合中央会では、第一次世界大戦後の急激な独占資本の集中によって困窮に追いやられ、飢餓と娘の身売りなど悲惨な状況にあった農村で、農民が産業組合に結集することによって資本主義の魔手から自らを守るために組合員の「協同」を訴えた。その精神を広めるメディアとして誕生したのが本誌である。

創刊号の巻頭に謳われているように、その精神は共同精神を家庭において涵養することであり、めざすところは家庭で協同心を育み、お互いの人権を尊重し、人間平等と相互扶助の精神を根底において共存同業の社会の実現にあった。

その内容としては、本誌が「一家一冊万能雑誌」と称されたように、修養、解説、農業、婦人、子供記事等、多岐に亘り、「共存同業」相互扶助「協同」といった、産業組合精神を説くと同時に、農村の生活・文化の向上を目指し、実用記事にも特色がみられる。また、投書欄、座談会記事を通して農村生活者の声をきくことができるのも貴重である。上司小剣、菊池寛、白鳥省吾、直木三十五ら広範な作家の作品のほか、岡本一平、田河水泡をはじめとする挿画・表紙絵も充実している。発行部数は昭和一〇年九月号で一〇〇万部を超え、農村の社会的・経済的發展をめざした雑誌として、農村社会に根づいていった。

現在、本誌の原本を所蔵している大学・研究機関は極めて少ない。近代日本史を築いた基底というべき農村と産業組合の歴史を明らかにする重要資料として、創刊より一九四九年までの全号を「都市版」を合わせ、四期に分けて復刻し、地方文化史・自治問題・農業史・女性史研究等に提供するものである。——不二出版

「推せんと言葉」―順不同

### 恐慌期農村の

### 貴重な資料・情報を満載

川野重任（東京大学名誉教授）

この推薦文を書くべく私は家の光協会資料室を訪ねて思わず時を忘れた。前後七〇年近くにも及ぶ既刊『家の光』誌の分量もさることながら、内容の面白さ、貴重さに思わず読みふけてしまおうのだった。かつてUCLAのある研究者が戦前の日本農村と対外政策との関連の研究に來日、資料を『家の光』誌に求めて、ここに半年近くも通ったという話を聞いてさこそと思った。それほどこの雑誌の中には、大正末年から戦前、戦後にかけての日本の農村社会の生きた動きを知るに足る貴重な資料が溢れている。元来、今の各種協同組合、かつての産業組合の中央指導組織、産業組合中央会によって始められ、後、家の光協会に引きつがれ、忽ち発行部数一〇〇―一五〇万の「一家一冊万能雑誌」となるにいたったものだが、その内容は決して単なる協同主義啓蒙の情報誌といったものではない。特に今回の復刻版第一期、II期の時期はあたかも昭和農業恐慌期の、農村を中心とした極端な社会的不安、動揺の大時代で、この情勢下に政治がいかにこの農村不況と不安に対応しようとし、また、農村がいかにこれに耐えようとしたかを知ることについて、極めて貴重な情報、資料を豊富に提供している。それはまた、一種の社会改良主義を標榜する協同主義、協同組合主義にとつての正念場でもあったが、その意味でも貴重な歴史的資料として推薦したい。

### 協同の精神で不況を克服

佐藤喜春（全国農業協同組合中央会 J A 全中 元会長・故人）

今日、わが国の農業・農村を取り巻く環境は大変厳しく、自由化、都市化、高齢化の進展、さらには減反、担い手の不足等により、農村の活力低下が進んでいます。



### 「関連年表」

- 一九〇〇年 産業組合法公布
- 一九〇五年 大日本産業組合中央会創設（初代会頭 平田東助）
- 一九一〇年 韓国併合
- 一九一四年 第一次世界大戦はじまる
- 一九一八年 米騒動全国に波及
- 一九二〇年 戦後恐慌。米価暴落、小作争議急増
- 千石興太郎、中央会主事に就任
- 一九二二年 前日本勸業銀行総裁志村源太郎、第一代会頭として就任
- 古瀬伝蔵、賀川豊彦、杉山元治郎らと日本農民組合を創立、雑誌「農政研究」刊行
- 一九二三年 志村・千石体制始動
- 一九二五年（大正一四） 『家の光』創刊
- 一九二八年 『農村文化の提唱』（二月号巻頭言）
- 一九二九年 梅山一郎、編集主任となる
- 一九三〇年 世界恐慌、日本に波及
- 一九三一年 『婦人公民権が議を通過したら』（三月号特集）
- 柳条湖事件
- 一九三二年 雑誌『家の光』誌上に『家の光新聞』新設
- 五・二五事件
- 農産漁村経済更生運動開始
- 一九三三年 『家の光』百万部普及五ヶ年計画
- 一九三四年 賀川豊彦の連載小説「乳と蜜の流るる、郷はじまる」
- 「被服の改善目標十五カ条」「食物の改善目標十六カ条」（一〇月号）、「悪習慣の矯めなほし運動」（一月号）
- 一九三五年 『家の光』普及部数一〇〇万部突破（キング誌推定七五万部、「主婦の友」八五万部）
- 一九三七年 蘆溝橋事件
- 『皇国のため拳国 致せよ』（九月号「日支事変特集」）
- 一九三八年 国家総動員法公布
- 一九三九年 第二次世界大戦はじまる
- 一九四〇年 大政翼賛会発足
- 『有馬頼寧を囲んで新体制の動きを訊く』（一〇月号）
- 一九四一年 六月号より農業記事を「増産推進の頁」と改称、「職域奉公」の提唱
- 一九四三年 『皇国の興廃を決するもの』（一九四三年五月）、「急ぎ三機でも多く戦線へ」（一九四四年二月）、「我らも体当たりを敢行せん」（同年一月）など
- 戦争協力を促す記事がめだつようになる
- 戦時統制を強力に行うため、農業団法により産業組合を農業会に統合
- 一九四五年 七月、九月まで休刊
- 敗戦

一方、モノ、金より、人々は生きがいや心の豊かさを求める文化の時代ともいわれますが、文化的で心豊かであるためには、何よりも地域経済の安定、国土や自然環境の維持が必要です。そのためには、活力ある農業・農村が確立されなければなりません。

『家の光』が産業組合中央会（今の農業協同組合中央会の前身）から創刊された、一九二五年（大正一四年）頃は、農村は冷夏による凶作や飢餓等で不況のどん底にあり、農村が疲弊、困窮する一方、富が急速に地主や独占資本に集中するという時期でした。この疲弊した農村を救うために、先人たちは血の滲むような苦勞と努力をされ、その心を支えたのは「協同」の精神にはかなりません。『家の光』はこの「協同の心」を家庭で育むことを編集方針に発刊され、以来今日まで約七〇年間変わることなく受け継がれています。

このたび、不二出版より『家の光』の復刻版ができることは、当時の国民生活、農村社会の実態を知る貴重な史料として、また困難な事態に対処してきた先人たちの知恵や情熱、実践方法を学びとる教材として、活用出来ることになり、今日の農村・農業が抱える問題にどのように対処すべきかを示唆するものとして極めて意義深いものがあると思います。

### 農村生活改善の元祖

矢口光子（元農村生活総合研究所センター理事長・故人）

終戦後の昭和二三三年秋に農林省に生活改善課がおかれ、農政に始めて生活を考えることを連合軍により促された。日本人の発想によるものでもなく、また貧困のどん底のような農村の生活へのお手伝いをするということだから、周囲の理解も薄く、並大抵ではなかった。まして男尊女卑の歴史とした農村の女性達に行動を促すことも難儀であった。しかし全国の農漁村の女性達が一斉に立ち上がったのは壮観であった。これは『家の光』が大正一四年に創刊され、その中に農村の生活を向上させる手だてを普及記事として組みこんでこえたという発行部数は、農家の人々に光を与え、杖ともなってい



た証拠であろう。欲しがりません勝つ迄は、と思いきまされていた非常時や戦時中も、『家の光』が「自分の生活の自立」を促し、プラクティカルな姿勢・モダニズムの態度をとりつづけたことには、心から脱帽するのみである。

今、日本の生活の状況は怪しくなっている。都市文明はその地域の生活特質がみられなくなったが、まだ農村にはその地域の生活質が残っている。これを背負い続けた『家の光』の功績を我々は広く報せ感謝したいと思う。

## 昭和史検証の重要な視角を内蔵 井出孫六(作家)

産業組合法が公布されたのは明治三三(一九〇〇)年、つまりそれが一九世紀の終わる年であったのは、象徴的なことだ。日清戦争をへて、日本社会の構造に大きな変化が現れたことを、それは示していたといえぬだろうか。

それから四半世紀、産業組合は農村を基盤として発展し、三二七万組合員を対象に、産業組合法公布二五周年事業として機関誌『家の光』の創刊されたのが大正一四(一九二五)年であったのも、象徴的なことといわなければならない。

大正一四年といえば、すでに各地に小作争議が頻発していたが、それは昭和の農村恐慌という激震の予兆でもあった。雑誌『家の光』はそのような危機に向けて船出していったものと読みとることができよう。

産業組合の機関誌として位置づけられていたとはいえ、「一家一冊万能雑誌」のキャッチフレーズのもと、「共存同業」をうたった『家の光』が全国の農家に迎えられ、昭和一〇年には一〇〇万部の大台にのったその秘密は何であったのだろうか。

やがて時代は不幸な戦争に突入していくことになるが、『家の光』発展の軌跡には、よきにつけあしきにつけ、日本の農村のいなく苦悩が焼きこまれていったといつてよく、そこには昭和史検証の重要な視角が内蔵されているといつてよいだろう。

を養ふところは、実に組合員の家庭そのものである。……本誌の目的は、この共同心の泉を家庭で涵養せんとするに存する」と掲げられました。

『家の光』は発刊以来、幾多の困難を極めながらも趣意書内容の記事を忠実に掲載し、農村・農業情報誌として、生活文化誌として、読者に新しい知識・技術を提供し、知恵を引き出し、励みをあたえ心豊かな農村の暮しづくりに大きく貢献しています。

国際化、情報化のめまぐるしい発展を遂げた今日、あふれる物資、利便性の高い文化生活に、個での暮らしを楽しむ風潮が広まり、連帯や協同活動への参加が疎まれる傾向です。

かかる時代なればこそ、肩を寄せ、支え合い、分かち合い、励まし合って今日を拓いた人々の活動や足どりを読みとり、近代化で失った様々な技を呼び戻し、心を潤し、生活をエンジョイすることが大切と考えます。

今度の復刻版『家の光』は、草創期の時代を知らない年代も多くあった現在、「温故知新」の好書となり、協同組合運動の発展に大きく資するものと期待いたします。

## 未来へのメッセージ

宮崎礼子(日本女子大学教授)

「腰の痛さや、この田の広さ、四月五月の日の長さ……農人は戻るといふ、困り汁は煮えず、杓子は見え、赤児は泣くし……」(田植歌)。特殊日本の「家」制度のもとで「奴隷に近い」といわれた農業女性は六〇〇万人。農家戸数の七割の四〇〇万戸が小作と自作、乳児死亡は出生一〇〇に対して一七(郡部)にも及んだ。日本には「家はあっても家庭はなかった」(丸岡秀子)とき、『家の光』は「家庭こそ共同心の泉である。われ等の理想の社会は組合員の家庭で養われる」と創刊の言葉(志村源太郎会頭)を掲げて発刊されている。

まもなく農地改革後半世紀。いま日本の農業は外庄の下で農業経営体の株式会社容認論さえも農政に登場している。それを許さないためにも、担い手としての家族経営農業の足腰をいかに強くするか



## 「温故知新」の好書

竹部喜代子(全日本女性組織協議会顧問)

農村では小作争議が頻発し、社会問題となっており、これを救う道は、組合運動によって経済の向上を図ることと考え、それには組合員および家族の産業組合運動の理解を深める家庭向け雑誌を、産業組合法発布二五周年の大正一四年五月に、『家の光』を発行にこぎつけました。志村源太郎会頭が創刊号の巻頭に「われ等の理想は、同心協力」の精神であり、共存同業の社会である。……この共同精神



が要請されるのである。そのためには、農家経営者(生活と生産)として全国津々浦々で活動を展開している農業女性の、権利や地位の質的保障を二〇〇一年に向かって実現することが基本となる。

『家の光』復刻によって伝えられる未来へのメッセージは、いま家族経営農業Ⅱ農業家庭を単位としながら、互いに助け合うこと、すなわち共同、協同の積極的意味づけに活かされたいものと思う。

## 農村の女性問題を 見つめなおすために

樋口恵子(東京家政大学教授)

戦前、女が人間扱いされなかった時代、なかでも農村の嫁などは牛や馬と同じで丈夫でよく働き、よく産みさえすればよかった時代、何度も襲う凶作は、つねに飢えの恐怖をもたらして、農村の女性は二重の抑圧と向き合わねばならなかった。

そんなとき、力のない一人一人が「組み合う」ことによって困難な状況を克服しようと産業組合中央会ができたことは、ある意味では奇跡のようなできごとだった。その共同精神を「愉快で幸福な」健全なる「家庭で育もう」という趣旨で発刊されたのが本誌『家の光』である。

『家の光』はおよそ文化的なものから見捨てられていたに近かった農村女性の心をたちまちとらえ、その生活改良主義は豊富な実用記事と共に浸透していった。しかしそれがたとえ家庭内の平等を謳ったものであっても、母性と性役割分担が強調されている限り、農村女性の解放にはつながらないことはいうまでもない。また、本誌が小作争議にあらわれるような農村の不満を緩和する役割を果たしたことも事実で、先の侵略戦争へ向けて多くの兵士を無条件にささげることになったためにもみられなかった。

農産物の輸入自由化、減反、結婚相手不足、等々農村の抱える問題は今も大きい。そして問題があればあるだけ、魅力ある農村作りは情熱を燃やす若い人が増えてきている。明日の農村、とくに農村の女性問題を考えるために本誌を読みなおす意義は大きい。



# 一方ぎ防の害災

煮立つた鍋をもつ時は  
あたりの人氣を確めよ

煮立つた鍋をもつ  
て急に脇へおろさ  
うとしたとき、床  
を拭いてゐた女中  
さんに躓いて、熱  
湯をあびせかけ  
て、ひ  
どい目  
にあは  
せた例が  
ある。

煮立つた鍋をもつときは、必ず  
あたりに人氣のあるなしを確めてからするだ  
けの心がけがほし  
い。

鍋をもち運ぶのは  
手持布を用意せよ

鍋を持ち運ぶときに、熱してゐ  
て手の肌がたえられぬために、前  
掛の端とか、ありあはせの布巾を



使ふと、よく思はぬ熱さを感じて失敗するこ  
とがある。

これを防ぐには五寸角くらゐの木  
綿布を四五枚重ねて刺し縫した手持  
布を用意して下けておくがよい。

腐敗食物を舌で知る法

この食物が腐敗してゐるかどうか  
といふことは、臭ひをかいでみて  
も、色を見てもはつきり見當が  
つかぬ場合が多い。

そのときは、そのもの  
の一部を口中に含んでみ  
るのが最も安全である。舌の先に



びり／＼  
とした  
感じを  
受ける  
ときは腐敗の兆候と見  
て、處置をつけてよい。  
従つて、これは呑みこまずに、  
はき出せばよい。

←なぜ辨當から中毒を起すか

防空演習のとき折詰辨當の副食物玉子燻か  
ら、一どに千人の  
中毒患者を出し  
たことがあつ  
た。

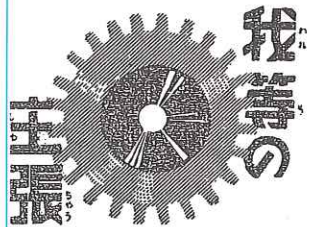


これは辨當  
につめた御飯  
の熱いうちに  
玉子燻を入れ  
て、すぐ蓋をした  
ために、適當の水分と温度から腐敗  
細菌が繁殖して、短時間に臭つたの  
である。

これに似た話は、一年申通して、あ  
ちこちでするぶん聞くことである。  
子供の辨當をつめる場合、御飯を  
冷してから、副食物を入れる注意が  
必要である。

特に、辨當の中毒は、これからの季節に多  
いから、お互ひに注意したいものである。

協同報國運動の提唱 (40)



## 協同報國運動の提唱

理青聯全國聯合  
理事 長 森 廣 之

るる途を講ぜんとしつゝある。明ら  
つかんとする形勢にある。

### 握る農村

ては、一般の懸命なる努力にもかゝ  
り、又は農村民の能力發揮の能率  
られつゝある。かゝる困難の主要な  
我々が指摘して來たやうに、永年に  
されてきた農村の状態を、責任ある  
ために外ならない。

にみて兵力、勞力、食糧原料及び工  
決定的に戰時經濟の鍵を握る。さら  
つて、農村勤勞民が能力を發揮する  
ところ、ます／＼甚大となるであら  
の第一線を擔當するものは、我々産





第IV期《都市版》にて全巻完結！

# 家の光

《復刻版》全四期

慢性的貧困に疲弊する農村生活の向上と自立、  
協同精神を家庭から育むため発刊された家庭雑誌。  
産業組合中央会機関誌として創刊され、十年後には  
百万部を突破した本誌こそ全国各地の農村の状況を伝える  
貴重な資料であり、近代史・地方文化史・自治問題・  
女性史研究等に資する文献として復刻刊行！

第I期 全25巻 1925年(大正14)5月～1931年(昭和6)6月 揃定価 本体45万円十税

第II期 全25巻 1931年(昭和6)7月～1935年(昭和10)8月 揃定価 本体45万円十税

第III期 全52巻 1935年(昭和10)9月～1949年(昭和24)12月 揃定価 本体92万円十税

第IV期 全36巻 1935年(昭和10)9月～1941年(昭和16)11月(都市版) 揃定価 本体64万円十税

推せん 井出孫六 十川野重任 十佐藤喜春 十竹部喜代子 十

樋口恵子 十宮崎礼子 十矢口光子 (五十音順)

解説 古桑実 (協同組合図書資料センター)



不二出版



### 近代日本の農村と 産業組合の歴史を明らかにする

本誌は、現在の全国農業共同組合中央会（J A 全中）の前身である産業組合中央会が、産業組合法公布二五周年事業の一つとして、産業組合教育のために一九二五年、創刊した家庭雑誌である。

創刊号の巻頭に謳われているように、その精神は共同精神を家庭において涵養することであり、めざすところは家庭で協同心を育み、お互いの人権を尊重し、人間平等と相互扶助の精神を根底において共存同業の社会の実現にあった。

その内容としては、本誌が「一家一冊万能雑誌」と称されたように、修養、解説、農業、婦人、子供記事等、多岐に亘り、「共存同業」相互扶助「協同」といった、産業組合精神を説くと同時に、農村の生活・文化の向上を目指し、実用記事にも特色がみられる。また、投書欄、座談会記事を通して農村生活者の声をきくことができるのも貴重である。上司小剣、菊池寛、白鳥省吾、直木三十五ら広範な作家の作品のほか、岡本一平、田河水泡をはじめとする挿画・表紙絵も充実している。発行部数は昭和一〇年九月号で一〇〇万部を超え、農村の社会的・経済的發展をめざした雑誌として、農村社会に根づいていった。

現在、本誌の原本を所蔵している大学・研究機関は極めて少ない。近代日本史を築いた基底というべき農村と産業組合の歴史を明らかにする重要資料として、創刊より一九四九年までの全号を「都市版」を合わせ、四期に分けて復刻し、地方文化史・自治問題・農業史・女性史研究等に提供するものである。——不二出版

「推せん言葉」——順次

### 恐慌期農村の 貴重な資料・情報を満載

川野重任（東京大学名誉教授）

この推薦文を書くべく私は家の光協会資料室を訪ねて思わず時を忘れた。前後七〇年近くにも及ぶ既刊『家の光』誌の分量もさることながら、内容の面白さ、貴重さに思わず読みふけてしまうのだ。かつてUCLAのある研究者が戦前の日本農村と対外政策との関連の研究に來日、資料を『家の光』誌に求めて、ここに半年近くも通ったという話を聞いてさぞと思った。それほどこの雑誌の中には、大正末年から戦前、戦後にかけての日本の農村社会の生きた動きを知るに足る貴重な資料が溢れている。元来、今の各種協同組合、かつての産業組合の中央指導組織、産業組合中央会によって始められ、後、家の光協会に引きつがれ、忽ち発行部数一〇〇一五〇万の「一家一冊万能雑誌」となるにいたったものだが、その内容は決して単なる協同主義啓蒙の情報誌といったものではない。特に今回の復刻版第一期、二期の時期はあたかも昭和農業恐慌期の、農村を中心とした極端な社会的不安、動揺の大時代で、この情勢下に政治がいかにこの農村不況と不安に対応しようとし、また、農村がいかにこれに 대응しようとしたかを知るについて、極めて貴重な情報、資料を豊富に提供している。それはまた、一種の社会改良主義を標榜する協同主義、協同組合主義にとつての正念場でもあったが、その意味でも貴重な歴史的資料として推薦したい。

### 協同の精神で不況を克服

佐藤喜春（全国農業協同組合中央会（JA全中）元会長、故人）

今日、わが国の農業・農村を取り巻く環境は大変厳しく、自由化、都市化、高齢化の進展、さらには減反、担い手の不足等により、農村の活力低下が進んでいます。



一九〇〇年——産業組合法公布  
一九〇五年——大日本産業組合中央会創設初代会頭（平田東助）  
一九一〇年——韓国併合  
一九一四年——第一次世界大戦はじまる  
一九一八年——米騒動全国に波及  
一九二〇年——戦後恐慌、米価暴落、小作争議急増  
——千石興太郎、中央会主事に就任  
一九二二年——前日本勧業銀行総裁志村源太郎、第一代会頭として、古瀬伝蔵、賀川豊彦、杉山元治郎らと日本農民組合を創立、雑誌「農政研究」刊行  
一九二三年——志村・千石体制始動  
一九二五年（大正一四）——『家の光』創刊  
一九二八年——『農村文化の提唱』（二月号巻頭言）  
一九二九年——梅山二郎、編集主任となる  
一九三〇年——世界恐慌、日本に波及  
一九三一年——『婦人公民権が議を通過したら』（三月号特集）  
——柳条湖事件  
一九三二年——雑誌「家の光」誌上に『家の光新聞』新設  
——五二五事件  
——農山漁村経済更生運動開始  
一九三三年——『家の光』百万部普及五ヶ年計画  
一九三四年——賀川豊彦の連載小説「乳と蜜の流るる、郷」はじまる  
——『被服の改善目標十五カ条』、『食物の改善目標十六カ条』（一〇月号）  
——『悪習慣の橋めなほし運動』（一二月号）  
一九三五年——『家の光』普及部数一〇〇万部突破（キング誌推定七五万部、『主婦の友』八五万部）  
一九三七年——蘆溝橋事件  
——『皇国のため拳国致せよ』（九月号、日支事変特集）  
一九三八年——国家総動員法公布  
一九三九年——第二次世界大戦はじまる  
一九四〇年——大政翼賛会発足  
——『有馬頼寧を囲んで新体制の動きを訊く』（一〇月号）  
一九四一年——六月号より農業記事を「増産推進の頁」と改称、「職域奉公」の提唱  
一九四三年——『皇国の興廃を決するもの』（九四三年五月）、「急ぎ」機でも多く戦線へ（九四四年二月）、「我らも体当たりを敢行せん」（同年二月）など  
——戦争協力を促す記事がめだつようになる  
——戦時統制を強力に行うため、農業団体法により産業組合を農業会に統合  
一九四五年——七月、九月まで休刊  
——敗戦



一九三二年——雑誌「家の光」誌上に『家の光新聞』新設  
——五二五事件  
——農山漁村経済更生運動開始  
一九三三年——『家の光』百万部普及五ヶ年計画  
一九三四年——賀川豊彦の連載小説「乳と蜜の流るる、郷」はじまる  
——『被服の改善目標十五カ条』、『食物の改善目標十六カ条』（一〇月号）  
——『悪習慣の橋めなほし運動』（一二月号）  
一九三五年——『家の光』普及部数一〇〇万部突破（キング誌推定七五万部、『主婦の友』八五万部）  
一九三七年——蘆溝橋事件  
——『皇国のため拳国致せよ』（九月号、日支事変特集）  
一九三八年——国家総動員法公布  
一九三九年——第二次世界大戦はじまる  
一九四〇年——大政翼賛会発足  
——『有馬頼寧を囲んで新体制の動きを訊く』（一〇月号）  
一九四一年——六月号より農業記事を「増産推進の頁」と改称、「職域奉公」の提唱  
一九四三年——『皇国の興廃を決するもの』（九四三年五月）、「急ぎ」機でも多く戦線へ（九四四年二月）、「我らも体当たりを敢行せん」（同年二月）など  
——戦争協力を促す記事がめだつようになる  
——戦時統制を強力に行うため、農業団体法により産業組合を農業会に統合  
一九四五年——七月、九月まで休刊  
——敗戦



一方、モノ、金より、人々は生きがいや心の豊かさを求める文化の時代ともいわれますが、文化的で心豊かであるためには、何よりも地域経済の安定、国土や自然環境の維持が必要です。そのためには、活力ある農業・農村が確立されなければなりません。『家の光』が産業組合中央会（今の農業協同組合中央会の前身）から創刊された、一九二五年（大正一四年）頃は、農村は冷夏による凶作や飢饉等で不況のどん底にあり、農村が疲弊、困窮する一方、富が急速に地主や独占資本に集中するという時期でした。この疲弊した農村を救うために、先人たちは血の滲むような苦勞と努力をされ、その心を支えたのは「協同」の精神にほかなりません。『家の光』はこの「協同の心」を家庭で育むことを編集方針に発刊され、以来今日まで約七〇年間変わることなく受け継がれています。



このたび、不二出版より『家の光』の復刻版がでることは、当時の国民生活、農村社会の実態を知る貴重な史料として、また困難な事態に対処してきた先人たちの知恵や情熱、実践方法を学びとる教材として、活用出来ることになり、今日の農村・農業が抱える問題にどのように対処すべきかを示唆するものとして極めて意義深いものがあると思います。

### 農村生活改善の元祖

矢口光子（元農村生活総合センター理事長、故人）

終戦後の昭和二三三年秋に農林省に生活改善課がおかれ、農政に始めて生活を考えることを連合軍により促された。日本人の発想によるものでもなく、また貧困のどん底のような農村の生活へのお手伝いをするということだから、周囲の理解も薄く、並大抵ではなかった。まして男尊女卑の歴史とした農村の女性達に行動を促すことも難儀であった。しかし全国の農漁村の女性達が一斉に立ち上がったのは壮観であった。これは『家の光』が大正一四年に創刊され、その中に農村の生活を向上させる手だてを普及記事として組みこんでいたことが基本にあったからである。昭和一〇年には一〇〇万部をこえたという発行部数は、農家の人々に光を与え、杖ともなつてい



た証拠であろう。欲しがりません勝つ迄は、と思いきまされてきた非常時や戦時中も、『家の光』が「自分の生活の自立」を促し、プラクティカルな姿勢・モダンビズムの態度をとりつづけたことには、心から脱帽するのみである。

今、日本の生活の状況は怪しくなっている。都市文明にはその地域の生活特質がみられなくなったが、まだ農村にはその地域の生活質が残っている。これを背負い続けた『家の光』の功績を我々は広く報せ感謝したいと思う。

### 昭和史検証の重要な視角を内蔵

井出孫六(作家)

産業組合法が公布されたのは明治三三(一九〇〇)年、つまりそれが一九世紀の終わる年であったのは、象徴的なことだ。日清戦争をへて、日本社会の構造に大きな変化が現れたことを、それは示していたといえぬだろうか。

それから四半世紀、産業組合は農村を基盤として発展し、三二七万組合員を対象に、産業組合法公布二五周年事業として機関誌『家の光』の創刊されたのが大正一四(一九二五)年であったのも、象徴的なことといわなければならない。

大正一四年といえば、すでに各地に小作争議が頻発していたが、それは昭和の農村恐慌という激震の予兆でもあった。雑誌『家の光』はそのような危機に向けて船出していったものと読みとることができよう。

産業組合の機関誌として位置づけられていたとはいえず、「一家一冊万能雑誌」のキャッチフレーズのもと、「共存同業」をうたった『家の光』が全国の農家に迎えられ、昭和一〇年には一〇〇万部の大台にのったその秘密は何であったのだろうか。

やがて時代は不幸な戦争に突入していくことになるが、『家の光』発展の軌跡には、よきにつけあしきにつけ、日本の農村のいづく苦悩が焼きこまれていったといつてよく、そこには昭和史検証の重要な視角が内蔵されているといつてよいだろう。

を養ふところは、実に組合員の家庭そのものである。……本誌の目的は、この共同心の泉を家庭で涵養せんとするに存する」と掲げられました。

『家の光』は発行以来、幾多の困難を極めながらも趣意書内容の記事を忠実に掲載し、農村・農業情報誌として、生活文化誌として、読者に新しい知識・技術を供給し、知恵を引き出し、励みをあたえ、心豊かな農村の暮しづくりに大きく貢献しています。

国際化、情報化のめまぐるしい発展を遂げた今日、あふれる物資、利便性の高い文化生活に、個での暮しを楽しむ風潮が広まり、連帯や協同活動への参加が疎まれる傾向です。

かかる時代なればこそ、肩を寄せ、支え合い、分かち合い、励まし合つて今日を拓いた人々の活動や足どりを読みとり、近代化で失った様々な技を呼び戻し、心を潤し、生活をエンジョイすることが大切と考えます。

今度の復刻版『家の光』は、草創期の時代を知らない年代も多くなった現在、「温故知新」の好書となり、協同組合運動の発展に大きく資するものと期待いたします。

### 未来へのメッセージ

宮崎礼子(日本女子大学教授)

「腰の痛さや この田の広さ 四月五月の日の長さ…… 農人は戻りし 団子汁は煮えず 杓子は見えず 赤兎は泣くし……」(田植歌)。特殊日本的「家」制度のもとで「奴隷に近い」といわれた農業女性(六〇〇万人。農家戸数の七割の四〇〇万戸が小作と自作、乳児死亡は出生一〇〇に対して一七(郡部)にも及んだ。日本には「家はあつても家庭は無かつた」(丸岡秀子)とき、「家の光」は「家庭こそ共同心の泉である。われ等の理想の社会は組合員の家庭で養われる」と創刊の言葉(志村源太郎会頭)を掲げて発刊されている。

まもなく農地改革後半世紀。いま日本の農業は外庄の下で農業経営体の株式会社承認論さえも農政に登場している。それを許さないためにも、担い手としての家族経営農業の足腰をいかに強くするか



### 「温故知新」の好書

竹部喜代子(全国女性結核協議会顧問)

農村では小作争議が頻発し、社会問題となつており、これを救う道は、組合運動によつて経済の向上を図ることと考え、それには組合員および家族の産業組合運動の理解を深める家庭向け雑誌をと、産業組合法公布二五周年の大正一四年五月に、『家の光』を発行にこぎつけました。志村源太郎会頭は創刊号の巻頭に「われ等の理想は、同心協力精神であり、共存同業の社会である。……この共同精神

昭和の家庭の会都

文野常吉

水野常吉

岸田軒造

三代ついでかぬ都会の家庭

昭和の家庭の会都

昭和の家庭の会都

昭和の家庭の会都

就に語る会

就に語る会

就に語る会

就に語る会

就に語る会

が要請されるのである。そのためには、農家経営者(生活と生産)として全国津々浦々で活動を展開している農業女性の、権利や地位の実質的保障を二〇〇一年に向かって実現することが基本となる。

『家の光』復刻によつて伝えられる未来へのメッセージは、いま家族経営農業＝農業家庭を単位としながら、互いに助け合うこと、すなわち共同、協同の積極的意味づけに活かされたいものと思う。

### 農村の女性問題を見つめなおすために

樋口恵子(東京家政大学教授)

戦前、女が人間扱いされなかつた時代、なかでも農村の嫁などは牛や馬と同じで丈夫でよく働き、よく産みさえすればよかった時代、何度も襲う凶作は、つねに飢えの恐怖をもたらして、農村の女性は二重の抑圧と向き合わねばならなかつた。

そんなとき、力のない一人一人が「組み合う」ことによつて困難な状況を克服しようと産業組合中央会ができたことは、ある意味では奇跡のようなできごとだった。その共同精神を「愉快で幸福な健康なる」家庭で育もうという趣旨で発刊されたのが本誌『家の光』である。

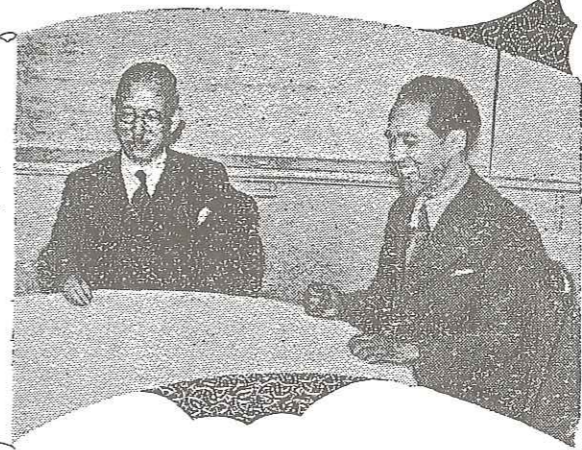
『家の光』はおよそ文化的なものから見捨てられていたに近かつた農村女性の心をたちまちとらえ、その生活改良主義は豊富な実用記事と共に浸透していった。しかしそれがたとえ家庭内の平等を謳つたものであつても、母性と性別役割分担が強調されている限り、農村女性の解放にはつながらないことはいままでもない。また、本誌が小作争議にあらわれるような農村の不満を緩和する役割を果たしたことも事実で、先の侵略戦争へ向けて多くの兵士を無条件にささげることになんのためらいもみられなかつた。

農産物の輸入自由化、減反、結婚相手不足、等々農村の抱える問題は今も大きい。そして問題があればあるだけ、魅力ある農村作り、に情熱を燃やす若い人が増えてきている。明日の農村、とくに農村の女性問題を考えるために本誌を読みなおす意義は大きい。



内容見本 国際外交を巡る秘話打明け話談会昭和二年九月

国際外交を巡る秘話打明け話談会 (54)



国際秘話談座

記者 北支事變で外交問題がやかましい折から、一夕、国際間の外交を巡って、趣味あり、教訓あるお話をうかよましたら、國民の外交への関心を高め、理解を深める一助とならうかと存じまして、お集りを願ひました。小松さんから皮切を願ひます。

二つのベッドと 太い葉巻

小松 外交會議で最も有名なのは、一八七八年のベルリン會議ですが、ロシアからはゴルチャコフ、イギリスからは Дизレリが出席し、主人公はビスマルクであつた。鈴木さん、カイザー・ホフは今でもありますか。鈴木 外務省の眞向ひにあります。

(出席者) (寫眞向つて右より)

- 讀賣新聞外報部長 鈴木 東民
元 外交官 小松 緑
評論家 伊藤 正徳
東京朝日新聞 尾崎 秀實

名古屋市では、商工青年に對して業務の指導を通して、りつばな人格の識見をそなへた産業人を鍛へあげることに努力してゐると聞き、その實情を紹介するため、指導者鈴木明氏以下、熱心な商工青年十一名の出席を得て、名古屋市公會堂で、この座談會をひらきました。

全國商工青年の燈臺

記者 御市の商工青年の指導は、この

- 出席者
名古屋商工青年團 鈴木 明
商工實務研究會主事 栗田 政雄
賦力業(二十歳) 石黒 一甫
絲商(二十歳) 眞野 正稔
物商(二十歳) 川村 豊
灯製造卸商(廿五歳) 瀧本 守
藥業(二十三歳) 小島 竹夫
布商(二十五歳) 加藤 善三郎
道工(廿三歳) 中 神
服商(二十三歳) 加藤 善三郎
工青年團書記 戸田 山稅
古屋市視學 牧野 豊之
知縣農林主事 喜多與三作
知縣支會主事 白砂 政吉
主事 岩越 治三郎
主事 竹内 義正

一商工青年の行きかた座談會昭和二年七月

第一期 第一卷 第25卷 復刻版概要

Table with 3 columns: Volume Number, Date, Page Count. Includes volumes 1-25.

第二期 第二卷 第50卷 復刻版概要

Table with 3 columns: Volume Number, Date, Page Count. Includes volumes 26-50.

第三期 第三卷 第102卷 復刻版概要

Table with 3 columns: Volume Number, Date, Page Count. Includes volumes 51-102.

菊判・上製・総一萬二、三八八ページ
●体裁
●挿定価
●第一期配本一覽

菊判・上製・総一萬二、八八八ページ
●体裁
●挿定価
●第二期配本一覽

菊判・上製・総一萬五、八七六ページ
●体裁
●挿定価
●第三期配本一覽



# 家の光

〔第IV期〕全36巻 《都市版》復刻版概要

●体裁

菊判・上製・総二万八、三三二ページ(解説は第103巻に収録)

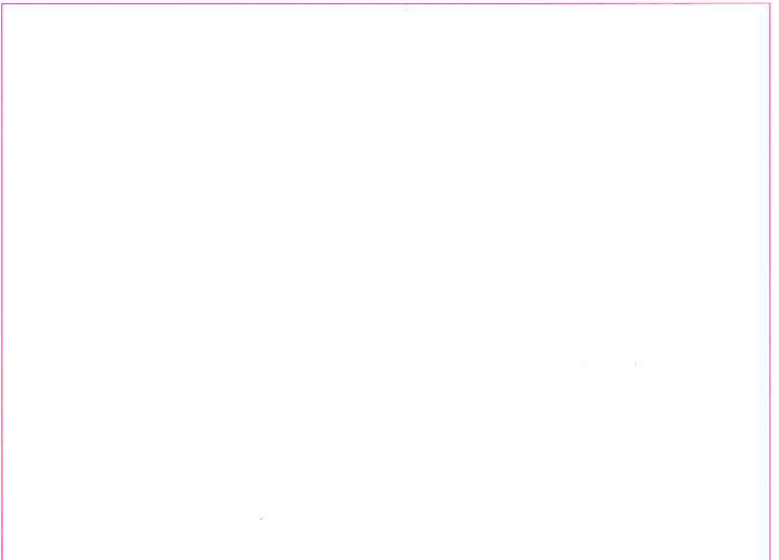
●挿定価

本体六四万円十税

●第IV期配本予定

第103巻	昭和10・9～10	516頁	第21回配本 二〇〇〇年二月 九万円十税 ISBN4-8350-3026-5
第104巻	昭和10・11～12	528頁	
第105巻	昭和11・1～2	540頁	第22回配本 二〇〇〇年五月 九万円十税 ISBN4-8350-3032-X
第106巻	昭和11・3～4	534頁	
第107巻	昭和11・5～6	534頁	第23回配本 二〇〇〇年八月 九万円十税 ISBN4-8350-3038-9
第108巻	昭和11・7～8	532頁	
第109巻	昭和11・9～10	534頁	第24回配本 二〇〇〇年十一月 九万円十税 ISBN4-8350-3044-3
第110巻	昭和11・11～12	534頁	
第111巻	昭和12・1～2	540頁	第25回配本 二〇〇一年二月 九万円十税 ISBN4-8350-3050-8
第112巻	昭和12・3～4	536頁	
第113巻	昭和12・5～6	540頁	第26回配本 二〇〇一年五月 九万円十税 ISBN4-8350-3056-7
第114巻	昭和12・7～8	538頁	
第115巻	昭和12・9～10	536頁	第27回配本 二〇〇一年八月 一〇万円十税 ISBN4-8350-3062-1
第116巻	昭和12・11～12	536頁	
第117巻	昭和13・1～2	542頁	
第118巻	昭和13・3～4	538頁	
第119巻	昭和13・5～6	548頁	
第120巻	昭和13・7～8	552頁	
第121巻	昭和13・9～10	552頁	
第122巻	昭和13・11～12	556頁	
第123巻	昭和14・1～2	544頁	
第124巻	昭和14・3～4	540頁	
第125巻	昭和14・5～6	536頁	
第126巻	昭和14・7～8	536頁	
第127巻	昭和14・9～10	536頁	
第128巻	昭和14・11～12	542頁	
第129巻	昭和15・1～2	530頁	
第130巻	昭和15・3～4	490頁	
第131巻	昭和15・5～6	450頁	
第132巻	昭和15・7～8	450頁	
第133巻	昭和15・10～12	578頁	
第134巻	昭和16・1～3	402頁	
第135巻	昭和16・4～5	400頁	
第136巻	昭和16・6～7	376頁	
第137巻	昭和16・8～9	344頁	
第138巻	昭和16・10～11	296頁	

●表示価格は、全て税別です。



## 不二出版(株)

〒1-3-0026 東京都文京区向丘1-2-12  
電話 03-3812-4436  
フAX 03-3812-4464  
振替 0016002940804

●《都市版》について——『家の光』は、昭和10年10月から同16年11月の間、本誌(農村向け)と共に、《都市版》が刊行されていた。《都市版》は、表紙画が本誌と異なると共に、内容構成が都市生活者に対する記事が多く、本誌と共通の記事・論文等もあるが、弊社では、《都市版》の所蔵が極めて少ないことを考慮し、今日まで収集できたものを全て復刻する。

●《都市版》の欠号について——昭和15年10月号、同16年10月号の二号は、未収録である。